不思議なソオダ水　検印省略

定価　六八〇円

昭和四五年十一月十五日　第一版発行

著者　小沼　丹

発行者　竹内静江

発行所　三笠書房

東京都新宿区戸山町三五
電話　東京（二〇三）七七八一
〒162　振替　東京二二〇九六

日本製版／豊文社製本

© Tan Onuma　Printed in Japan 1970 〔0093—001015—8936〕
乱丁，落丁のものは本社またはお買求めの書店にてお取替えいたします。

不思議なソオダ水　目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

不思議なソオダ水　9
マダムの階段　47
赤い帽子　83
木　犀　107
遠い顔　137

女雛　159
乾杯　171
二人の男　201
不可侵条約　233
焼餅やきの幽霊　261
あとがき　291

装幀　内田克巳

不思議なソオダ水

不思議なソオダ水

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

マノ・マモル氏は謹厳実直の士である。

マノ・マモル氏は鼻下に八字髭を畜えている。蓋し、今日にあって八字髭なんか生やしているのは謹厳実直の士に決まっているのである。黒い洋服を着て、八字髭をひねっているマノ氏を見ると、人は何やら十九世紀あたりの人間の前にいる気がして懐旧の情を禁じ得ないかもしれぬ。

マノ・マモル氏の日常生活は極めて規則正しい。朝は決まって五時半に起き、上厠し、五時四十五分には歯を磨いている。六時には食卓に向い……等等、よしんばカント氏とまでは行かぬだろうが、その日常生活の正確な運行は、毎晩酒を飲み宿酔などに悩まされている徒輩に慚愧の念を起こさずにはいない。こう云う人物を謹厳実直の士と呼ばずして、他の何人に謹厳実直なる形容詞を冠し得ようか？

マノ・マモル氏は独身である。尤も一度結婚したことはあるが、細君は結婚して二年目に、

マノ氏以外の男性に好意を覚えたものらしく出奔してしまった。その理由については、諸説紛紛として容易に真相が摑めない。マノ・マモル氏自身、口を噤して語らない。因みに申し添えるが、謹厳実直の士なるものは常に「沈黙は金」なる格言の遵奉者であることを忘れてはならない。しかし、細君がマノ氏のもとを去るとき、ある信ずべき筋に洩らしたと云う言葉によると、

——あんな味気ない生活、真平だわ。

と、細君は云ったと云う。蓋し、女性に味気ない思いをさせるものこそ、正真正銘の謹厳実直の士と断定して差支えないのである。その後、既に二十年近い年月が経って、マノ・マモル氏は四十五歳である。その間、マノ・マモル氏について、女性に関する噂を耳にしたものがあったら御眼にかかりたい。

マノ・マモル氏は……いや、これ以上、マノ氏の謹厳実直なることを証明する必要はあるまい。氏は既に二十年に亘って、ある私立高等学校で国語を教えている。その間、マノ・マモル氏が授業を休んだのは、二回しかない。一度は郷里の父親が死んだとき、一度は脳病院を逃げ出した気狂いに、学校からの帰途、棍棒で足を払われたときである。このときマノ氏は足を挫き入院したが、担架で運んでくれれば授業すると云い張って当局者を大いに感激させ且つ当惑

させた。

何故、気狂いはマノ氏に危害を加えたか、これはあとになって判ったことであるが、その脳病院にマノ氏と同じように八字髭を生やした患者がいて、例の気狂いはその患者に日頃大分痛めつけられていたのである。マノ氏の名誉のために附加しておくが、マノ氏は決して頭がへんてこなわけではない。また、同じく八字髭を畜えていると云っても、脳病院の髭はむろん謹厳実直の士と呼ばるべきではない。

しかし、世間にはマノ・マモル氏のような尊敬すべき存在に対してすら、兎や角註釈を加えたがる小人共が尠くない。

――マノさんが女に子供を産ませたら、太陽が西から登るだろう。

――沈香もたかず屁もひらずと云うところかね。

――人生、何が愉しくて生きているんだろうか？

なぞ、愚劣なことを云っていい気になっている手合いは、到底、謹厳実直の士を理解し得ない無縁の末輩と云うべきである。

ところで、二月のある寒い日のことである。マノ・マモル氏の家に訪客があった。マノ・マ

モル氏は六十ばかりの婆やと二人、郊外の部屋数が四つの家に住んでいる。婆さんが出てみると、肥って赦ら顔の男が名刺を出してマノ氏に面会を求めた。名刺にはアキヤマ・ゴンベイとあって、住所はマノ氏の郷里と同じ北国の町が刷りこんである。

マノ氏は在宅していた。と云うことはその日が日曜だったことを意味する。マノ氏は茶の間の炬燵で日曜日の日課の昼寝をしていた。謹厳実直の士と云えども昼寝ぐらいはするのである。婆さんは名刺を持ってマノ氏の傍に行き、

——もしもし、旦那様。

と声をかけた。しかし、婆さんが起こす必要はなかった。と云うのは、玄関の客が突然大声で怒鳴ったから。

——おい、マノ君、俺だよ、アキヤマ・ゴンベイだよ。

マノ氏は眼をさました。しかし、一時間の予定の昼寝を三十四分でちょん切られたので、明らかに不満らしい顔をした。これは五十八分でちょん切られても同じことである。マノ氏は婆さんの出した名刺を見て、ちょいとばかり不思議そうな顔をした。マノ氏が玄関に出て行くと玄関のアキヤマ・ゴンベイは大声で笑って、やあ、久し振りだなとか元気かとか云ったが、マノ・マモル氏は鹿爪らしい顔をして、ふむと点頭くにすぎなかった。しかし、アキヤマ・ゴン

ベイは一向に気を悪くする気配もなかった。

——相変らず、むづかしい顔をしているな。ちょっと上らせて貰うぜ。

と、マノ氏の許可も得ず勝手に靴を脱いで上って来た。

——一体、とマノ氏は云った。何の用事かね？

——こりゃ御挨拶だな、全く君らしい。しかし、玄関じゃ話も出来ん。君の家には客間ぐらいあるんだろう？

そう云いながら、アキヤマ・ゴンベイは持参した包みをマノ氏に差出した。それをマノ氏は一向に嬉しそうな顔もせず受けとって訊ねた。

——これは何だね？

——いや、そこらで買って来た菓子さ。つまらんもんだ。

マノ氏は婆さんに包みを渡しながら云った。

——お土産だそうだ。そこらで買って来たつまらん菓子だそうだ。

それから、主客はマノ氏の書斎の火鉢を真中に話をした。と云っても喋るのは専らアキヤマ・ゴンベイばかりで、マノ氏はむづかしい顔をして八字髭をひねっているのである。アキヤマ・ゴンベイの話と云うのはこうである。アキヤマ・ゴンベイはマノ氏と同郷で同じ中学を出て、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com